

日本社会福祉教育学会

NEWS LETTER No.50

Japanese Society for the study of Social
Welfare Education



事務局

〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1

東北公益文科大学 小関研究室気付

TEL 0234-41-1288 ☎ : info@jsswe.org <http://jsswe.org/>

2026年3月31日発行

目次

1. 巻頭言..... 2
虫の目・鳥の目・魚の目から事例を捉える力を養う
日本社会福祉教育学会理事 保正 友子
(日本福祉大学)
2. 日本社会福祉教育学会 春季研究集会..... 2
竹中 麻由美
(川崎医療福祉大学)
◆参加者の声◆
吉島 紀江 (京都華頂大学)
竹中 麻由美 (川崎医療福祉大学)
3. アポリア連載 3
まとめー高等教育の将来像を考える 日本社会福祉教育学会監事 福山 和女
(ルーテル学院大学名誉教授)
4. 専門教育とは、「〇〇〇」である！..... 5
専門教育とは、「専門職として歩みを始める〇歩目」である！
岡 永遠 (赤羽高齢者あんしんセンター)
5. お知らせ 7
6. 編集後記 7

1. 巻頭言



理事 保正 友子 会員
(日本福祉大学)

虫の目・鳥の目・魚の目から事例を捉える力を養う

日本社会福祉教育学会 理事 保正 友子
(日本福祉大学)

社会福祉士国家試験を終えた学生から、「事例問題が難しかった」という声を聞くことが増えている。年々、事例問題の出題割合が高まり、現場実践者にとっては取り組みやすい一方で、学生にとっては難易度が高いと感じられることも少なくないようである。このような状況を踏まえ、事例を適切に読み解く力をどのように養うかについて、私見を述べたい。

事例理解の要は、何よりもアセスメント力にある。もちろん、プランニングや支援実施とも密接に関連しているが、根幹となるアセスメントが十分に行われているかどうか、その後の支援の質を大きく左右する。アセスメントにおいて求められる視点として、虫の目(事象の細部を捉え、相互作用で生じる影響力をみる視点)、鳥の目(人と環境の関連性やネットワークを俯瞰する視点)、魚の目(時間の流れの中での変化を捉える視点)が挙げられる。

社会福祉専門教育に置き換えて考えると、これら三つの「目」を養うためには、次の三つの力を強化する必要がある。

第一に、授業で整理して学んだ各論の知識を、分野横断的に結びつけ、相互作用として理解する力。第二に、把握できている情報だけでなく、まだ明らかになっていない情報を洞察し、それらを統合して全体像を俯瞰する力。第三に、段落ごとの事例内容を的確に読み取り、前後の文脈を踏まえて変化を捉える文章読解力である。

では、この三つの力を育むためには、どのような教育方法が求められるのだろうか。ソーシャルワーク演習と実習の場面に即して考えてみたい。

ソーシャルワーク演習では、より踏み込んだ事例検討を繰り返し行うことが重要である。具体的には、段落ごとの事例要約の作成、支援前後のイメージを付加したエコマップの作成、アプローチ後の変化を予測するディスカッション、既知の情報と未知の情報を峻別して整理する練習などが挙げられる。

ソーシャルワーク実習では、知識や技術が複雑に溶け込んでいる実践現場において、それらがどのように活用されているのかを分析し、実習指導者からフィードバックを受ける機会を得ることが大切である。

本学会においても、多様な教育実践事例を持ち寄り、学生の「事例をみる目」を育てる取り組みがさらに活性化することを願っている。



2. 日本社会福祉教育学会 第16回春季研究集会

竹中 麻由美 (川崎医療福祉大学)

ご参加いただいた皆さま
ありがとうございました！

第16回春季研究集会は「生成AIを“うのみにしない”ためのAIリテラシー-専門職教育に欠かせない仕組み理解とリスク認識-」をテーマ

に、関西学院大学梅田キャンパスで開催された。

講師は川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療データサイエンス学科講師 谷川智宏氏である。谷川氏は9月に開催された第21回大会において「指導する立場で知っておきたいイマドキ学生の生成AIの使い方」というテーマでランチョンセミナーの講師を務められた。興味深い内容であり、もっと聴きたいという要望を受けた今回の企画であった。

第一部の講義はzoom配信によるハイブリッド開催であった。まず生成AIの仕組みをわかりやすく説明して頂き、生成AIは「予測」して出力しているのであって「理解」しているわ

けではないという基本を学んだ。その上で、専門職教育で特に注意すべきリスクについて、具体例を挙げつつ、複数のリスクが相互に影響しあいながら問題を引き起こしていることを理解した。そして生成 AI の仕組みを理解した上での「専門的判断」が重要であるとのまとめだった。

第二部は、会場参加のメンバーが3グループに分かれてワークショップを実施した、複数の生成 AI に同じプロンプトを入力し、出力された内容を手がかりに生成 AI の特徴やリスクについてディスカッションした。「この出力が何を意味しているの?」「この出力をどう活用できるの?」「どのような情報を入力すればより役立つの?」などと、活発な意見が飛び交った。生成 AI を実習や演習に活用する可能性についても検討された。



谷川智宏氏
(川崎医療福祉大学)



👉 当日の様子

【参加者の声】

吉島 紀江（京都華頂大学）

生成 AI の利便性と限界について、リスクを理解し使用する重要性について、再確認することができました。生成 AI の確立的言語モデルに基づいて生成される仕組みであることを理解し、もっともらしい回答は得られるが正確性とは違うというリスクの理解をして使用することが分かりました。教育の場で使用する場合も学修支援のツールとして

有効であるがリスクや情報の批判的思考に必要な知識を身につけるよう教育をしていく必要があると思いました。

竹中 麻由美（川崎医療福祉大学）

第 21 回大会ランチョンセミナーに続き参加しました。今や生成 AI は、教育現場のみならず人々の生活の一部であり、効用と共に様々な弊害や課題が指摘されています。生成 AI の仕組みを理解することで、生成 AI が出力した内容を“うのみにする”のではなく、出力の“背景をアセスメントする”ことにつながると感じました。ワークショップではそれぞれの先生方がどのように生成 AI を活用しているのか、学生をどのように指導しているのかなども伺うことができ参考になりました。結局のところ、活用する人間の判断力や倫理観が問われていることを再認識できました。



3. アポリア連載

ニュースレター45号より、「アポリア連載」が始まりました。

「アポリア連載」は、本学会の研究対象は「高等教育における社会福祉専門教育」という認識のもと、さまざまな高等教育機関に所属する会員の皆さまが社会福祉教育のあり方を考えるきっかけとなれば、という思いより本連載を始めました。

今号で「アポリア連載」は最終回となります。第6回目は、本学会監事である福山和女会員（ルーテル学院大学）です。



まとめ—高等教育の将来像を考える

日本社会福祉教育学会 監事 福山 和女
(ルーテル学院大学名誉教授)

ニュースレター・アポリア連載：「高等教育を考える」が、第6回で一区切りをつける。これまでのまとめをする番が回ってきた。論文テーマのもと、5人の執筆者は研究者、学者の見解を述べている点で興味深いものである。志水幸氏（社会福祉教育学会会長）「アポリアとしての高等教育における社会福祉教育」、川廷宗之氏（当学会・前会長）「アポリアとしての、高等教育における専門学校教育を考える」、阪口春彦氏（当学会理事）「短期大学教育を考える」、白川充氏（当学会副会長）、「大学教育を考える」、小山隆氏（当学会副会長）「大学院教育を考える」。全員が大学教授として活躍されている。

まず、アポリアの定義は、志水氏の会長挨拶から引用すると、「アポリアは哲学的難題または問題の中の一見解明できそうにない行き詰まりのこと」（志水 2026）である。本アポリア連載は、社会の現状での一見矛盾していると思われる前提を考察し、当学会の今後の進むべき道を模索する上で、参考になるものである。

次に、「まとめ」とは、情報や内容を整理して、一つに集約することと考えれば、筆者が、それぞれの学者の見解の整理と集約をすることはできない。各学者の独自性の尊厳の保持から考えると、それは難しいことである。日本社会福祉教育学会は、2005年10月31日に設立され、その発起人による設立趣旨は、「社会福祉やソーシャルワークの『危機』の時代での**実践・理論・教育・研究・教育の改革・再編**」（2026 志水）であった。

アポリア全5回分の連載内容を参考にして、筆者が遭遇した出来事が高等教育のアポリア的志向と関連があった2つの事象を述べてみよう。

（その1）2000年に高齢社会の介護の社会的負担の軽減のために介護保険制度が制定された。1998（平成10）年7月29日に教育課程審議会の答申で、高校に専門教育に関する教科「福祉」の設置が決定された。それを機に、全国的に教科福祉の教員免許取得のための3か月間の研修が実施された。各都道府県から推薦を受けた受講者、一か所500人規模の研修で、筆者は、科目「演習」を担当した。受講者の態度は、怒りの感情に満ちていた。彼らは、教員免許取得者の英語教諭である。英語教員の数を減らすことを目的に、福祉の教員免許の取得を強制的に命じられ、福祉の授業をする責任が課せられた。彼らは口々にいった。「高校には障害児童はいませんよ。私たちの専門は英語です。」と。つまり、社会福祉制度や施策が教員の専門性の変更を推薦という形で実施させたのである。英語から福祉への強制的切り替えの要請は、その教員の人権侵害であるようにも思える。その悶々としている教員が、「高校生に人権擁護を教える」ことには一見矛盾がある。筆者は、授業内容を大きくギアチェンジしたが、「福祉を教える」こととは、専門性の質がそれぞれの主体、教育者、受講者、生徒に大きく影響を及ぼし、その成果までも左右することを強く実感させられた。

（その2）教えることと対になる、学ぶことについて考えたい。筆者がカリフォルニア州立大学パークレー校大学院公衆衛生修士課程で 地域精神保健について学んでいた頃、1920年出版のアメリカ史上初の「**教育心理学**」の教科書を読んだ。教育の専門家にとっての心理学の必要性を説いたものだが、最初のページに、「人はなぜ、学ぶのか？」との問いが書かれていた。なぜか非常に強く心に響いた。続いて、「もしも、あなたを取り巻く周りのものが、常に同じ状態であるならば、全く変化しない状態であれば、あなたは何も学習する必要はないでしょう。」「でも、私達を取り巻く環境は、秒速で、刻々と、少しずつ変化しています。私たちは、誕生と同時に生きることを開始し、その後常にこの環境の変化に対応することが求められています。新しいことを学習する必要性はそこにあるのです」と。



高等教育についてのアポリアに戻ろう。この理解しがたい「学習とはなにか」、「教育とは何か」の問いに対して、5名の学者が、高等教育、専門教育、短期大学、大学、大学院という制度・「器」についてそれぞれ定義し、高等教育体制システムの多側面から概説し、その内容は、それぞれのシステムの交互作用のさまを描写していたと筆者は、理解した。

そこで、筆者は、システムの相乗効果から、高等教育体制について考えてみた。その結果、そのシステムは12システムに整理できた。各システムにおける要素をサブシステムとして分析した(表1)。その分析例として文部科学省高等教育法の大学の規定文を示す。

表1：高等教育体制の構成要素12システムの相乗効果

システム	サブシステム—細項目
1. 体制の質	同質・異質性、独自性、共創・協働体制
2. 周囲の環境	ミクロ、メゾ、マクロレベル
3. 教育機関	専門教育、専門高校、短期大学、大学、大学院(大規模・小規模)
4. 教育者	専門領域、資格、経験年数
5. 教育の内容	理論、知識・概念、方法・技術、理念の提供(教授・研究)
6. 教育の目的	専門領域研究 資格 教養、学問、実践、トレーニング
7. 教育の目標	能力の養成・ミクロ、メゾ、マクロレベル(観察、理解・分析・応用・理論化)
8. 学習者	高校生—大学院生—社会人、
9. 学習の目的	理論、知識・概念、方法・技術、理念(道徳的)の習得
10. 学習の目標	能力習得:ミクロ・メゾ・マクロレベル(観察、理解・分析・応用・理論化)
11. 教育過程・時間	短期→長期
12. 教育効果	評価項目(12システム)

(2026 筆者作成)

「大学(3)は、**学術知識(5)**を受け、**専門**の学芸を教授研究し(6)、**知的、道徳的および応用的能力(10)**を展開させることを**目的**としている。」()内の数字は、システム項目番号であり、サブシステムは太字で強調)

この大学の規定では、12個のシステムの中から、システム**3, 5, 6, 10**の交互作用の相乗効果を取り上げ、そのサブシステムとして、**学術知識の提供、専門性の教授研究、学習者の能力養成**を含めている。

このシステムの分析から、高等教育のアポリアの解を見出すことができればという期待を持つが、社会状況の困難な現状では、まだまだ高等教育についての将来像を創造することは困難なことであると理解した。

参考文献

- 福山和女(2009)「対人援助職の心得：人の理解」『福祉介護機器 techno プラス / 福祉介護機器』 techno プラス編集委員会 編 2(4), 40-44.
 藤井佳子(2020)「高等学校福祉科教員養成の現状と課題に関する一考察—福祉科教育法の実践を通して」『教職研究』第34号 73-86.立教大学 教職課程
 志水幸(2026)日本社会福祉教育学会ホームページ「会長のご挨拶」
 矢幅清司(2000)「教科『福祉』創設と基本方針」矢幅清司・細江容子編著『改訂高等学校学習指導要領の展開—「福祉」編』明治図書

4. 専門教育とは、「〇〇〇」である！

ニュースレター45号より始まった「専門教育とは、「〇〇〇」である！」は、「実践者・研究者、各々の立場で「専門教育」について考えるきっかけとなれば…」という思いより、スタートしました。

若手研究の方や現場実践の方を中心に、その人自身が考える「専門教育」とは何であるのかを「〇〇〇」という一言で表現してもらい、その理由(何を以て専門教育としているのかなど)などを教えていただく内容です。

第6回目は、岡 永遠会員(赤羽高齢者あんしんセンター)の熱い想いをお届けします！

専門教育とは、「専門職として歩みを始める0歩目」である！

岡 永遠(赤羽高齢者あんしんセンター)

はじめに

私は大学院で学びを得た後に、地域包括支援センターで生活支援コーディネーターとして勤務をしている。大学院では、ソーシャルワーク実習に焦点を当て、習得できるコンピテンシー（能力）について研究を行った。修了後、地域包括支援センターで勤務をはじめ約1年を経過した。今回は、これまでに受けた専門教育が地域包括支援センターでの勤務においてどのように生かされているかという点に焦点を当てながら考えていきたい。

経験した専門教育

「専門教育」というとどのようなことが思い返されるだろうか。私は自身の研究でキーワードとしていた「実習」が第一に浮かんだ。私は、社会福祉協議会と地域包括支援センターで実習をさせていただいた。学生が、福祉の現場に直接触れる大切な機会となる。座学においては、ソーシャルワークの体系、対人援助技術、社会福祉機関の構造等多くのことを学習する。座学で学んだ「価値・知識・技能」を集約させ、学生自身に落とし込む作業が「実習」だと考えている。座学では、机上の中で展開されていた「価値・知識・技能」が現実世界の目の前に現れるものが「実習」である。「実習」は「専門教育」の中でも高い密度で、速い速度で「価値・知識・技能」を習得する大切な体験となったであろう。



専門教育と地域包括支援センターでの経験

専門教育が地域包括支援センターで勤務する上でどのように生かされてきたらだろうか。1年の経験を得て考えたことは、専門教育は「専門職として歩みをはじめの0歩目」になっていたのだということである。専門教育で統合された「価値・知識・技能」を用い、現場の中で勤務を行っている。専門教育は現場で勤務する上での基盤となっているのである。勤務をしていく中で、「価値・知識・技能」を肉付けしていくのである。相談業務を展開する場面で、地域の方々と協働する場面で、他機関と連携する場面で、どのような「価値・知識・技能」を使用したのか、また使用すれば良かったのか振り返り、試行錯誤を重ねていった。目まぐるしく変化する現場でより良い支援が展開できるように思考をした。このようなサイクルを行うために、「専門教育」で得た、「専門職として歩みをはじめの0歩目」は自分自身の指針として、現場の中で行かされてきたであろう。

終わりに

「専門教育」で得た、「専門職として歩みをはじめの0歩目」は、現場において自分自身の指針であり、有しておかなければならないものである。0歩目をいかにして現場において1歩目に派生させるのか。そのような考えで勤務を行っていた。自身の中で基盤となるものがなければ派生させることはできない。基盤をつくる作業が「専門教育」で行わなければならないことだと考える。現場の中で同一の事例、同一の場面は発生することはない。ただ、目の前で発生する場面を解決するために、基盤となるものは必ず存在する。「専門教育」で身につけ、それらを引き出して実行に移す。この作業の繰り返しだと考える。その中で、有していた0歩目を1歩先へ、さらにもう1歩先へと歩みを進める。学生時代に経験した「専門教育」は専門職として歩みを進める大切な基盤となっているのである。



5. お知らせ

令和7年度年会費納入のお願い

以前より、会員（会費）管理業務委託に向けて委託先との引継ぎ作業を進めておりますが、作業の遅れにより今年度年会費のご請求が遅くなってしまいました。このような時期となり、誠に申し訳ございません。

過日(令和8年2月20日付)、「令和7年度年会費納入のお願い」を会員の皆さまにお送りさせていただいております。年度末でご多忙の中、誠に恐縮でございますが、令和7年度の年会費の納入をお願いいたします。



ご所属先やご連絡先（メール等）等、変更された会員の皆さまは、お手数ですが事務局（info@jsswe.org）までご連絡いただけますようお願い申し上げます。



イベント開催情報や便利で役立つ教育ツールや教材、教育実践 tips（コツや秘訣）など、随時受け付けております！

お気軽に事務局（nl.jsswe@gmail.com）までご連絡ください！

6. 編集後記

ニュースレター50号をお読みいただき、ありがとうございます。年度末をむかえ、会員の皆さまも新年度に向けてさまざまな準備を始めている最中かと思えます。

一昨年度に始まった「アポリア連載」が、今号にて最終回をむかえました。来年度夏頃発行予定のニュースレターからは、新しい企画を始める予定です。お楽しみに！

季節の変わり目は体調を崩しやすくなりますので、ご自愛ください。



ニュースレター編集委員
島谷 綾部